

平成14年度「購入資料—中国陶磁器—」紹介

高橋 隆博

「どんな博物館ですか?」。よく耳にするフレーズである。言葉の主は、いつ開館したのかとか建物の規模とか、ましてや施設やスタッフのことを聞いているのではない。「どんな作品を、どのような資料をもっているのか」、この一点を問うているのである。こんな話を持ち出すまでもなく、収蔵品はまさに博物館の「顔」そのものである。とはいえ、「顔づくり」はそうたやすくはない。当博物館は、本山コレクション(考古資料)をはじめとし、これまで各方面から、そして多くの方がたのご厚意によって「顔」がつくられてきた。収蔵品の充実には、こうした寄贈のほか、寄託そして購入によってはかられてきた。これまで収蔵する数点の中国陶磁器を充実するため、まことに貴重な予算を割き、昨年度は4点の中国陶磁器を購入し、平成14年度も引き続いて5点の中国陶磁器を購入した。

1、灰釉獸耳大壺(前漢～後漢時代 高51.2センチ、胴径38.5センチ)

胴の中央部を大きく張りだし、下方にすばまる姿をした堂々とした大型の壺である。こうした器型は大型のかめの呼称である罍らいあるいは甗せんというべきかもしれないが、本作品はその折衷形をしている。外に広がる口縁の下方部と首部の付け根の2か所に繩席文をめぐらし、胴中央部のやや上部の左右2か所に耳を付け、すぐその上に獸頭形を飾っている。灰釉とは自然釉のことで、高火度で焼く窯では、焼成中に器に降りかかった灰によって素地の珪酸分が熔け、器の表面に自然に釉がかかることが多い。

前漢前期の灰釉陶器として確実なものは、湖南省の長沙馬王堆1号漢墓から出土した作例であり、埋葬時の封緘のままのものもあり、その付札や竹簡などによれば、スープや塩、塩辛などを入れた壺であった。おそらく本作例も墳墓におさめられた副葬品、つまり明器とみてよい。本来は蓋をともなうものであった。前漢(前202～後8)から後漢(25～220)のほぼ400年間は中国陶磁史上、第1期の黄金時代といえる。

この時代は厚葬の風習がいよいよ盛んとなり、さまざまな明器を焼成し、墓域をかざった。華北では灰陶と緑釉陶が、華南では自然釉陶と灰釉陶の明器が好まれた。

2、白磁龍耳瓶(唐時代 高40.2センチ、胴径20.0センチ)

瓶の肩の左右から立ち上がった龍形把手の龍口が、長頸瓶の盤口をかむ形の瓶を龍耳瓶といい、唐代の白磁器にも、また三彩陶器にも比較的多く見られる器形である。そのふくよかで温和な姿形は、唐の安定した国力と華麗な文化を物語るにふさわしい流麗さを具備している。こうした器形の早い例としては、隋時代の隋大業四年(608)の墓誌銘を伴出した、陝西省西安市の李静訓墓出土の双胴龍耳瓶が知られる。本龍耳瓶は出土地を明らかにしないが、7～8世紀のものであろう。

灰釉陶や加彩陶、ついで黒釉や緑釉、褐釉などの釉薬をほどこした施釉陶磁の中であって、「白いやきもの」の白磁の誕生は画期的であった。その開始時期については、今のところ東魏を襲った北齊(550～577)王朝下に生まれたとされている。河南省安陽市の范粹墓から出土した、白い透明釉をもつ高温で焼きしめられた白磁の四耳壺や碗がその根拠とされている。

「白いやきもの」には2種類がある。ともにカオリン質の高い白色の陶土(これに長石・珪石・蛙目粘土を加える)を用いることは同じだが、高火度の透明釉をかけた白磁と、低火度の透明釉をかけた白釉陶の2種類であって、本作例は後者に属する。

3、青白磁鑄文長頸瓶(宋時代 高25.0センチ、胴径12.2センチ)

鑄しのぎ(彫り文)の入った丸い胴に、これも鑄を入れた長首をつけた瓶で、首の中央左右に如意形の耳をつけている。口縁部の上下2か所に連珠文をめぐらし、その下に花文を飾り、首と胴の境界にもやはり連珠文をめぐらしている。宋



灰釉獸耳大壺



青白磁鑄文長頸瓶



白磁龍耳瓶

時代の青白磁の長頸瓶には瓜形胴をしている水注や瓶があるので、おそらくこれも瓜形瓶から発展した器形と考えられる。この長頸瓶には、もともと被せ蓋がついていたと思われるが、それを欠失しているとはいえ、その安定した姿形といい、シャープで洗練された造形感覚といい、宋代の11～12世紀頃、景德鎮窯でつくられた青白磁の逸品といえよう。その珍しい器形も貴重である。

青白磁とは、釉薬に含まれるわずかの鉄分が還元炎（燃焼に必要な酸素の供給が不足して、炭素の多い火炎による焼成）を受けて青味がかかった白磁のことで、影青（インチン）ともいう。宋代の代表的な白磁窯は、華北の定窯（河北省曲陽県）と華南の景德鎮窯（江西省景德鎮市）であった。定窯は晩唐期には青味のある白磁を焼いていたが、宋代には象牙のような色調、たとえば璧玉を思わせる白磁を世に出し、景德鎮窯は北宋に入った11世紀前後に、透明度の高い青味がかかった清冽な白磁、いわゆる青白磁を完成させた。



白釉鉄絵兎文瓶

4、白釉鉄絵兎文瓶（明代初期 高26.4㍎、
胴径15.6㍎）

白化粧地に鉄泥で兎文と「信福」「寿」字を描き、その上から無色透明の釉薬をかけて焼成した瓶で、ユーモラスな兎の表情といい、いささか崩れた書体といい、磁州窯の民窯の作例であろう。鉄絵とは、弁柄いわゆる酸化第二鉄や黄土などの含有鉄泥で絵付けする技法で、鉄砂ともいう。日本では、こうした技法の作例を絵高麗と呼んでいる。朝鮮半島の高麗青磁のうちで黒絵青磁をそう呼称していたところから、これに類するということによってそのように呼ぶようになったらしいが、白釉鉄絵あるいは白地鉄絵というべきであろう。元代さらには金代に流行する技法だが、本作例は明代に入ってからのものである。

磁州窯は、北宋代に現在の河北省磁県の観台鎮や彭城鎮に築かれた窯であったが、やがて河北・山東・安徽・河南・山西・陝西省の各地に展開した。白化粧をほどこした陶器は華北全域で焼成されており、これら全体を磁州窯と呼ぶのが一般的である。磁州窯は、白釉陶と黒釉陶を特色とし、白泥で釉薬の下に線描するイチ



青花宝相華文瓶

5、青花宝相華文瓶（明時代 高23.6㍎、胴
径12.0㍎）

すらりとした姿の典型的な梅瓶であり、この種の瓶では、蓋を失っているのが通常であるが、この作例の場合では、釣鐘形の被せ蓋をともなっているところが貴重である。青花つまり、日本でいうところの染付けによる意匠だが、3本の線条で全体を3区にわけ、肩のところには4つの如意頭形文を置き、そのなかに宝相華文をあわらし、胴部全体には宝相華文を描いている。下部には、景德鎮窯の青花磁器に特徴的にみられる、いわゆる「ラマ式蓮弁」と呼ばれる文様をめぐらしている。蓋と頸部には、蕉葉文をあらかわしている。蕉葉文は、元代の青花磁器にしばしばみられる。なお、如意頭形文だが、元来は中央アジアの花頭形文（カトーシェ）に由来する意匠である。青花の発色に生彩を欠くものの明代初期の作例とみてよい。